一生成香 No9「新年を寿ぐ」

研修リーダー　菊地　平

あけましておめでとうございます。初日の出を拝むたびに、生あることの偶然を有り難く思います。
年　の初めそれぞれの家では、神棚があればこれに拍手を打ち、仏壇があればこれに合掌をし、神社に参拝し、寺に参り、教会でひざまずく人もいます。誰もが何かの祈りを捧げます。手を合わすひと時の間、反省もあり、感謝もあり、願いもあれば、誓いもあります。人間だけがなし得るこの敬虔なひとときであろうと思い　ます。
私たちにはアメリカのように日曜日には皆が教会に行って唯一の神に祈るという習慣はありません。平素はそのような儀式は何もしないのに、正月には神社仏閣に初詣をし、春と秋の彼岸には先祖の墓参りをします。そして、クリスマスには教会に行ったり、家庭ではクリスマス・ケーキを買ってきてお祝　いをします。
一神教のように厳しく戒律を守ると言うこともありません。戒律を破った者には信賞必罰で望む原理主義ではなく、罪を憎んで人を憎まず、という人を許す心が日本文化にはあって、「お天道様が見てござる」という文化が生きていると思うのです。
芭蕉の句に「のどかなり　願いなき身の　初詣」があります。何の欲望も願い事もなかった当時の芭蕉が羨ましい限りです。ところが私たちの身の回りには、経済・政治・災害・環境・小子化・青少年・老人・国際問題など多くの不安、更には仕事や家庭や身辺の問題、心が重くなる要因には事欠かない時代に居ます。
けれども、どんな物事にも明暗両用の見方は出来るもので、新年だからこそ、明るいものの見方を基調にして事に当たって行くようにしたいものです。
尊敬する深川純一パストガバナー（伊丹 RC）が正月に因んで次ぎのようなお話をされたことがあります。
今の天皇が皇太子の頃。京都の万福寺に参られた時の事です。万福寺の上人は、韋駄天の話を皇太子にされたそうです。
仏様にも位があって、如来・菩薩、そして名の下に天の付く毘沙門天・韋駄天などがあります。韋駄天という仏様は僧侶や伽藍を守護される仏教の善神です。釈尊が亡くなった時、捷疾鬼が佛牙を盗んだのを追いかけて取り返したと言われています。
実は、太陽がまさに昇ろうとして、その端を覗かせたとき、光と共に世界の各家々に幸せあるように祈って、太陽が昇り上がる前に往復する仏だと言われます。そこで、毎朝韋駄天の祈りと行いを思い出して下さい。～と教えられたとのことです。
天皇が日本国民の幸せを祈られるように、ロータリアンたるもの全社員とその家族、そしてその取引先までもの幸せを祈る～それでこそロータリアンなのです。～とのお話でした。
天皇家では元旦に四方拝の宮中行事が行われます。平安朝・嵯峨天皇の御代に宮

中で始まった儀式が今も繋がっています。天皇は午前四時に起床されて、黄櫨染御包に威儀を整えられて、神嘉殿の南座にあって、伊勢の皇大神宮と豊受大神宮に向かって拝礼されます。ついで天神・地祇・天地四方山稜・日本国民の息災を祈られる～という儀式です。
古くからのしきたりの中で、ひたすら国民の安寧を願われる姿に、心からの敬意を表したいと思います。「国民に寄り添う」「国民とともにある」そんな君主は今の世界にはいません。被災地訪問などの報道を見るに付け、敬虔なお姿に改めて頭の下がる思いです。

さあ、ロータリーは今年度の折り返し点に来ました。残された半期を実りあるものにしていきましょう。「祈りの心で」。
山茶花や　地によろこびを　ひろげおり（苔羅）